

駅前の高速バスターミナル。

行き先を示す電光掲示板の下、夜行バスを待つ乗客が列を作っている。

連休で旅行か帰省でもするのだろう、ほとんどの人がキャリーケースや大きなバッグを持っていた。

そんな中、私はハンドバッグ一つだけを持って列に並んでいた。

路線バスと間違えているんじゃないか……列に並ぶ他の人から奇異の目で見られているような気がした。

「はあ……」

しかし、今の私にはそんな人の目なんかどうでもよかった。

バスが着き、運転手が乗客の荷物をトランクルームに預かり始める。

私は預けるものもなかったもので、先に車内に入る。

——今日、彼氏に振られた。

晴天の霹靂とはこのことだ。

確かに最近はお互い仕事などで忙しく、会う回数は減っていた。

それでも私は休みの日を彼に合わせたり、細かく連絡を取ったりしてお互いの心が離れ

ないように気を遣っているつもりだった。

それなのに……。

あまりのショックで自暴自棄になった私は、とにかくどこか遠くへ行きたいと考えなしに空いていた夜行バスに乗ることにしたのだった。

私は後方の窓際の席に座る。

窓の外に目を向けると雨が降っており、窓ガラスに流れる水滴が街灯をにじませていた。

——仕事が忙しくて会えないのは今だけのこと、もう少ししたら一緒に住んでゆくゆくは……そう色々計画していたのに。

どうやらそれが「重い」と捉えられてしまったようだ。

私が物思いにふけていると、荷物の運び込みが終わって他の乗客も続々と乗り込んできた。

そろそろ出発の時間。

行き先は全く知らない場所だ。

そこでふと私は不安になる。

勢いで乗ってしまったけれど、いざ本当に出発となると私は何をやっているんだろうと少し我に返った。

キャンセル料はかかるだろうが、今ならまだ降りられる。
やっぱり降りようかな、迷っていると、声をかけられた。

「――失礼します」

低音の落ち着いた声。

私と同じ年ぐらいか少し年上ぐらいの男性。

一言ことわってから、隣の通路側の席に座る。

私は軽く会釈する。

『〇〇行き、出発します』

降りにくくなってしまった、と思っているうちに夜行バスが出発する。

ああ、出発しちゃった――私は今更になって不安な気持ちになってしまう。

その気持ちが表情に出てしまっていたのだろう、隣の男性から声をかけられる。

「大丈夫ですか？」

私の具合が悪いのかと心配しているようで、顔をのぞきこむようにみてる。

整った顔立ちに今風のファッションをしているけれど、優しそうな人で私はドキリとしてしまう。

私は慌てて答える。

「あ、大丈夫です。体調が悪いわけじゃないです。ちょっと……落ち込むことがあって」「そうなんですネ」

私は内容はぼかしつつ、嫌なことがあって勢いでバスに乗ったことを話す。

彼は物腰が柔らかく、初対面だけど何だか話しやすかった。

——彼氏以外でこんなに雑談をしたのはいつ以来だろう。

元彼氏は束縛が強かったので、男友達も作らないようにしていたのだ。

話しているうちにバスに飛び乗った不安も消えていった。

恋愛では色々計画を立てていたけど、結局うまくいかなかった。

それなら何も考えずに思うがままにやった方がいいのかもしれない。こうして思いがけない出会いがあったりもする。

私たちはしばらく雑談をした。

波長が合うというか、初対面とは思えないほど話すことができた。

「何だかボクたち、相性が良いようですね」

彼も同じようなことを言ってくれて、孤独感を覚えていた私には慰めになった。

高速バスが走り続け、深夜になる。

乗客はみんな眠りこんで、車内はバスの走る音と振動だけが響いていた。

私もうとうとしていたけれど、ふと、胸のあたりに何かあたるのが分かった。
最初は気のせいかと思った。

それほど広い席でもないし、隣の人と接触することだってあるだろう。

自意識過剰だ——半分寝たままで私は考えていた。

また、眠りに落ちかけそうになったとき。

「んっ……」

そっと胸に触れるものがあつた。

隣の彼が胸を触ってきたのだ。

私はかすかに吐息のような声を漏らしてしまう。

「一目見た瞬間に分かりましたよ、ボクとあなたは相性バツチりだって」

彼は私の耳元でささやいた。

相変わらず優しい声だったが、先ほどとは少し違っていつ気のありそうな声。

どうしよう——私は声をあげようとしたが、中々勇気がでなかった。

それに——私自身、彼氏に振られたばかりでまだ気持ちが乱れているのかもしれない。会ったばかりの人に触られているというのに、なぜかそこまでの抵抗感を感じなかった。

彼は囁く。

「やめてほしかったら言ってくださいね」

彼は変わらず優しい声で言う。

やめてほしいと言ったら本当にやめてくれそうな感じがあった。

私は強く断ることもできなかった。

今ここで声をあげるのも気まずい気がしたし、そのうち満足したらやめてくれるかもしれない——私は受け身な考えでそのまま寝たふりを続けることにした。

彼は私の胸を触る、というよりはどこかいたわってくれているかのようなだった。

彼の手は徐々に私の服の胸元に近づいていき、ついに直接胸をさわってきた。

「んっ——♡」

私はまた吐息を漏らしてしまう。

目を閉じていても、彼の細く長い指が乳首を優しく指でなぞるのが鮮明に分かった。思えば、振られた彼氏ともずいぶんご無沙汰で、異性に触れられるのは久々のことだった。

隣の彼は指でなぞったかとおもうと、今度は乳首をこね回し始める。

しばらくの間、私の感度を推し量るかのように乳首をこねていたが、不意に爪の先で乳首の先を甘くひっかき始めた。

カリカリカリカリ……。

痛くない絶妙な力加減、小さな乳首から官能的な刺激が断続的に走る。

「どんどん硬くなっていますよ。やっぱり相性が良いみたいだね」

「あっ……♡んっ……♡」

私は寝たふりを続けようとするが、吐息が漏れてしまう。

これでは起きているのが完全にバレバレだ。

その私の様子を見て、彼は乳首に指を押し込んでグリグリとし始める。